



2階建ての高級な店舗で、週末はウェディングパーティで貸し切りになることが多いという。店名は中村氏が18歳の時に会った「電馬が行く(司馬遼太郎著)」にたいく感銘を受け、志を持って生きる事の大切さを知ったことから、バイオニア精神の代名詞として、当時から「kurofune」の名前は決めていたという。

「Living Cafe kurofune」  
(リビングカフェクロフネ)  
三重県伊勢市小木町560-8  
TEL.0596-36-7800  
1130~1500 17:30~24:00/月休  
<http://www.kurofune.com/>

# 一席の夕食も、心に刻む。 何のために働き、生きるのか？

HOP CLUB X 中村文昭 講演会 (有)クロフネカンパニー

## 飲食業界の講演にこの人あり 世に名高い「クロフネ」来る

京都を代表する外食産業の有志団体「ホップクラブ」、定例の講演会。今回のゲストは、年間300回を超える講演を行うことで有名な(有)クロフネカンパニー代表・中村文昭氏であった。実際、昨年は年間307回の講演をこなし、今回の入浴は35日講演ツアーの32日目であった。

一年のほとんどを講演に費やして、自店は大丈夫なのか？ 受講者の不安を払拭してみたのが、開口一番に放った「ウチの店はスタッフが異常にしっかりしているの(愛)」という一言だった。経営者がそれだけの間不在であっても、地域随一の人気を落とさない強固な基盤は、受講者の羨望でもあったろう。

講演内容は同氏の経験談であり、作務衣姿で現れた氏は、これまでの人生の経験談を話し始める。

## 師 はあまりに早く高みに上り 天国と地獄を見た人だった

バブル景気の天国と地獄。中村氏の師は、その両方を見た。師は早稲田大学在学中、事業を興す。学生ベンチャー華やかな頃である。BMWが「六本木カローラ」と呼ばれるほど、

街には高級車が溢れかえり、夜ごと豪遊を繰り返す若者が増殖した。師の事業も「多分に漏れず軌道に乗り、20歳そこそで絶頂の時代を迎えた。だが金が回り始めると修業が待っているもので、事業は下降線を辿り、借金取りに追われるまでになった。そんな矢先、父の計報が届く。

## 誰 もが傾聴せざるにいられない ドラマのような本当の話

師の父は苦学生だった。大学進学など、一部の富裕層にしか許されぬ時代、どうしても教師になるために大学に行きたかった。あまつさえ、中学卒業で「進学するくらいなら、働いて家に入金を入れる」と言われていたのだ。それでも諦めきれず、昼間働きながら夜間高校に通い始めた。「貯金して大学へ」。そう思うのだが、資金が足りなかった。父は一つの決断を下す。慰労金や障害者補償に思い至った彼は、自分の身体の一部と教師になる夢を秤にかけたのだ。旋盤工として働いていた彼は、人の目が無いことを確認し、機械に左手を突っ込むのである。ドラマの一節ではない、実話である。

## ど れだけ尊敬を受けられるか 目の当たりにした時、人は...

父の葬儀には何千人もが訪れた。父の教え子たちであった。会う人会う人に、「あなたの父ちゃんは何と」と、こんなと父の話を聞かされた。もちろん父を教える言葉である。「親が子供に残す、最後の教える、死ぬタイミングの上ない教を師に残して天に召されたと言え。父に恥じぬ人生を歩もう。全ての不幸が一度にやってきたと思っただが、結果、師は得難いものを得た。中村氏が18歳で出会ったとき、師は26歳。

軽トラックで野菜の行商をしていた。かつてを知る者は笑ったが、そのとき師には既に、確たる人生の座標軸があった。「ただ何となく大学に行く」。そんな文化とは、全く無縁な世界の住人になっていたのだ。

## 一生一度の宴も、日々の一席も 同じ心構えで望むべき、という話

中村氏の営む「リビングカフェクロフネ」では、年間何十組ものウェディングをこなしている。その都度、中村氏は若いカップルに問うのだ。「何のために結婚をするのか？」と、ふたりのために祝いを持って駆けつける人たちのために、人生の一部として、恥じることはない式にしない、パーティにしない、と。それは、日々の外食についても言えるのではないか。今日のこの一席は、この一度の食事は何のためにあるのか。大げさに聞かせるかもしれないが、それを心に刻んでおかなければならないのだ。

## 何 のために働き、生きるのか？ 深遠なテーマは、万人に響くのだ

目の前にいる純朴な高校生に、「何のために働いているんですか？」と聞かれて、どう答えることができるか？ 話のテーマはそこにある。教師になるために文字通り身も心も投じた人がいる。その志が子へ、そして子の弟子へと受け継がれ、我々の知るところとなった。

「ホップクラブ」や、飲食店だけに関わるものではない。逆に言えば、受講者全て、我々全てに関わるものであり、心のどこかに日々、持ち合わせているべきものだ。幸運にもその一端を聴くことができ、講演が人気である理由が解ったような気がするし、今回の講演に限って言うならば、明日の業界に、ひとつの繁栄のヒントがあったはずである。

## 中村文昭氏

(有)クロフネカンパニー代表。'44年1月18日生まれ。18歳で家出同然で単身上京、人生の師と仰ぐ人物に出会い弟子入り。野菜の行商を手伝うかたわら、数々の薫陶を受ける。19歳で行商で得た資金を元に、六本木にショットバーを開店。5店舗まで拡張。21歳で故郷の三重県に戻り、1号店となるショットバー「クロフネ」を。26歳で「リビングカフェクロフネ」をオープン。心のこもったレストラン・ウェディングを演出し、当地でダントツの知名度と人気を誇る。また、大阪でのプライドや店舗のプロデュース。人材育成にも注力。独特の手法で築き上げた全国的な友好関係と、それを交えた講演活動はつとに有名。